



パレスチナー「ハラメント」からの解放

池田 有日子

(いけだ ゆかこ)

京都大学地域研究統合情報センター-外来研究員

二〇〇四年八月、東エルサレム周辺をパレスチナ人のガイドに案内してもらった。まず、車に乗る前にイスラエルの区役所の前をとった。彼は、先日娘の小学校入学の手続きをしに行ったところ何時間も待たされたことを話し、「このような「ハラメント」は日常茶飯事だ」と語った。次に周辺に張りめぐらされた分離壁に連れて行ってくれた。その分離壁には、半ば意図的に隙間が造られており、パレスチナ人はその狭い裂け目をとって通勤、通学をしていた。それは誰にでもおられるような裂け目だった。テロリストの侵入阻止が分離壁建設の理由であるならば、このようなずさんな造りはありえないだろう。パレスチナ人はこれもハラメントだ！と力説した。彼と話していると、この「ハラメント」という言葉をよく聞いた。



東エルサレムの分離壁。お年寄りも子どもも、この隙間をとって長い道のりを通勤、通学している

わたしは、当初この言葉に何か違和感を覚えた。日本語に訳したときの「嫌がらせ」という言葉を連想し、パレスチナ人の歴史や現状を考えると何かそぐわない気がしたからだ。しかし、ハラメントという言葉を「他者を傷つけることで、自らの不満、トラウマ、ルサンチマン(怨恨)を解消しようとする試み」と解釈すれば、パレスチナ人にとっては、日常的な行政の遅滞、侮蔑的で差別的な眼差しや言葉扱いから、不当逮捕、空爆、虐殺に至るイスラエルの行為は、すべて同一の根のものとして認識されていると理解できる。



爆撃の破壊のあとが生々しく残されていたパレスチナ自治区議長府

別の日には、ヨルダンとの国境にあるバスポートコントロールへ行く機会があった。そのとき、横に座っていたパレスチナ人と話をした。彼は兄とともにアンマンでのビジネスから帰ってきたところであり、兄だけ取り調べを受けているとのことだった。結局、バスポートコントロールが閉まる間際まで話は続いた。

彼はヨルダン川西岸のイスラエル占領地パレスチナ自治区にずっと住んでおり、政治活動をおこなった筈で一九八八年から一九九二年までの四年間投獄されたが、今は政治活動からまったく足を洗っていることなどを語った。そして、政治的な問題について話がおよぶと、「結局、アラファトはイスラエルとアメリカとアラブ諸国のカードにすぎない(注:アラファトはこの三カ月後の一月に死亡)」「我々は自らの手による自由を望んでいたけれど」と吐き捨てるように言った。それは、イスラエルの占領とパレスチナ自治政府統治下で生きたパレスチナ人のひとつの本音なのだろう。

そのとき、家族に渡す山ほどのアンマンのお土産を見せてくれた。そのうちの君はいくつ?」と聞いてきたので、「三×オ」と答えた。「結婚は?」「していません」「ボーイフレンドは?」「いません...」「そんなことで一〇年後、二〇年後どうするんだい!」わたしは、ここがどこなのか、どういう会話の流れにあるのかよくわからなくなり、「そうですね...」と答えるしかなかった。彼は兄がようやく出てきたため腰を上げ、「ヨルダンからトルコに移民しようと思うんだ。それがイスラエルの手なのはわかってるんだけど...」と言った。

彼には守るべき家族があり、パレスチナの悲惨な現状を考えるならば、他の地へ移民することがよりよい幸福な選択なのだろう。しかし、直接受けた暴力の傷や、また暴力に屈したことはいない目と屈辱から解放されることはないだろう。兄と一緒に帰って行く彼を見送りながらそう思った。